様式４

大学等名　東京未来大学

自己点検・評価について

① プログラムの自己点検・評価を行う体制（委員会・組織等）

情報教育センター

（責任者名）杉本　雅彦　（役職名）センター長

② 自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	2025年度における本教育プログラムの履修者数は，こども心理学部7人，モチベーション行動科学部7人の計14人であった。単位修得者数は11人であり，単位修得率は78.6％であった。履修・修得状況は，学務システム上の成績データ等に基づき情報教育センターで確認し，各学部別の状況を把握している。2025年度は1・2年生を対象とする科目として開講しており，想定より履修者数は少なかった。次年度は対象学年の拡大に伴い履修者数の増加が見込まれるため，履修案内の充実と各学部への周知を進める。
学修成果	シラバスで科目のテーマと到達目標を明示しており，授業の内容に関連した課題，レポート，プレゼンテーション等を課すことで，学生の理解度を測りながら到達目標を達成できるよう取り組んでいる。2025年度秋学期第13回講義内で実施したプログラム独自アンケート（記名式，回収数10件）では，「この授業で得たもの」として，知識（用語・概念がわかる）7件，理解（仕組みや背景を説明できる）5件，視点（社会や課題の見方が変わる）3件，スキル（方法・手順を使える）3件が選択された。これらの結果から，知識・理解を基盤としつつ，社会や課題を見る視点，Excel等を用いた分析手順の習得にも一定の成果がみられた。今後も単位修得率，平均GPA，成績分布状況，課題等の評価状況に加え，学生アンケートの結果を情報教育センターで確認し，科目担当教員との協議を通じて学修成果の評価・改善を行う。
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	2025年度秋学期第13回講義内において，授業内演習の一部としてプログラム独自アンケートを実施した（記名式，回収数10件）。受講前と比べた学びに対する意識については，「とても高まった」2件，「高まった」6件，「変わらない」2件であり，8割の学生が肯定的な意識変化を示した。自由記述では，専門用語を細かく噛み砕くことで理解できるようになったこと，データ整理・分析を文系学生にも必要で実行可能なものとして捉えるようになったこと，データやICTを身近な事例や他科目と関連づけて考えられるようになったことが示された。情報教育センターでは，学生アンケート結果を科目担当教員と共有し，理解度が低い基礎概念や操作手順について，教材・演習課題・授業内説明の改善を行う。また，次年度は理解度を継続的に把握するため，アンケート項目の見直しを行う。
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	後輩等への推奨度については，2025年度秋学期第13回講義内で実施したプログラム独自アンケートの自由記述を参考に把握した。学生は本授業について，「データの視点から社会を見つめ直す授業」，「データの海に飛び込む前の準備体操」，「自分の判断力や思考力をレベルアップさせる授業」等と表現しており，データサイエンスを学ぶ入口としての意義を肯定的に捉えていた。また，「データサイエンスに興味はあるが，何から手をつければよいか分からない学生」，「Excelの理解を深めたい学生」，「自主的に学ぶ意欲のある学生」に向いているとの記述がみられた。一方で，授業内容の専門性がやや高く，学ぶ意欲がないと難しく感じる可能性も示された。情報教育センターとして，履修案内や授業内ガイダンスにおいて，本授業が初学者にとっての導入科目であること，および幼児教育・児童教育・心理・行動科学等の学修と接続することを明確に示し，履修意欲の向上を図る。
全学的な履修者数，履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	1・2年次より履修可能な選択科目として開講された科目であり，計画段階では履修希望者数の予測が難しく，全学部計60名程度を上限として開講したところ，14名にて科目開講を行った。2025年度の履修者数は開講上限に対して少ない状況である。科目担当教員からは，具体例や教材の提示により学生の理解を支援した一方，履修者への事前周知や学修意義の説明に改善の余地があるとの所見が示された。情報教育センターでは，履修モデルの提示，CoLSやガイダンスでの周知，既存授業との関連の明示により，全学的な履修者数・履修率の向上を図る。

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学外からの視点	
教育プログラム修了者の進路，活躍状況，企業等の評価	「データサイエンス基礎」は2023年度より履修可能な選択科目として新規に開講されたため，本科目を履修し，単位を修得して卒業した学生は現時点ではまだいない。本プログラムはリテラシーレベルであるため，修了者の進路先での活躍状況や企業等からの評価は，現時点では十分に把握できていない。本学では毎年，卒業生と就職先にアンケートを実施している。今後は，情報教育センターでは，本プログラムの成果を評価する項目の追加を検討し，修了者の進路・活躍状況を継続的に把握する。また，卒業生アンケートや就職先に関する調査項目を整備し，得られた結果をプログラムの改善や履修案内の充実に反映する。
産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	情報教育センターは，数理・データサイエンス・AIを学ぶ楽しさと学ぶことの意義を，学生の専門分野や将来の職務と接続して示すことを重点課題とする。2025年度のプログラム独自アンケートでは，学生から，本授業を「データの視点から社会を見つめ直す授業」，「現代社会の裏を見る授業」，「広い視野が得られる授業」，「今の大学生に求められる知識を得られる授業」と捉える記述がみられた。また，AIの倫理や責任，Excelによる分析，ヒストグラムや箱ひげ図，通信の仕組み等，具体的な学習内容に対する関心も示された。これらの結果から，身近なデータ，具体的な事例，演習課題を用いることにより，学生が数理・データサイエンス・AIを自分の生活，専門領域，社会的課題と関連づけて学ぶ機会が形成されていると判断できる。今後は，幼児教育・児童教育・心理・行動科学等の分野で活用できる事例を整理し，学ぶ意義をより明確に伝える教材・ガイダンスを整備する。
数理・データサイエンス・ＡＩを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	2025年度のプログラム独自アンケートでは，授業内容について肯定的な意見が多くみられた一方で，専門用語や演習課題に難しさを感じる学生も確認された。自由記述では，「先生のお手本についていくのが精一杯だったため，一人でどこまでできるのか試したい」，「プログラミングをもう少しやりたかった」，「具体的に役立つ場面や活用のされ方があると，より理解しやすかった」，「ダメな例も見て良い例と比較して学習したかった」といった改善に関わる意見が示された。内容・水準を維持・向上させるため，単純な内容の平易化ではなく，基礎概念の確認，操作手順の段階的提示，失敗例と良い例の比較，授業内小課題による形成的評価を組み合わせ，理解を支える授業設計に改善する。情報教育センターでは，科目担当教員と協議し，生成AI等の新技術を含む事例の更新と，教材・課題・評価方法の継続的な点検を行う仕組みを整える。
内容・水準を維持・向上しつつ，より「分かりやすい」授業とすること ※社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえて教育内容を継続的に見直すなど，より教育効果の高まる授業内容・方法とするための取組や仕組みについても該当があれば記載	2025年度の科目担当教員へのヒアリングでは，扱う内容の難度に対して学生が負担を感じる場面があることが確認された。内容・水準を維持・向上させるため，単純な内容の平易化ではなく，基礎概念の確認，操作手順の段階的提示，小課題による形成的評価，生成AI等の新技術を含む事例の更新を組み合わせ，理解を支える授業設計に改善する。情報教育センターでは，生成AIを含む社会的・技術的変化を踏まえ，データ活用，AI倫理，情報リテラシー，著作権，個人情報保護等に関する内容を継続的に点検する。必要に応じて教材や演習課題を更新し，科目担当教員と連携して教育内容・方法の改善を進める。